

葛藤する身体

—— グローバリゼーションにおける日本の女性達の象徴的抵抗

吉田 光宏

序

日本において男性と女性の政治的、社会的、経済的立場の平等をうったえるジェンダーフリーが表向きでは支持されてから久しいが、実情は「男女平等」の掛け声のもとで「働く女性」のイメージのみ先行している。「男女平等」どころか、フェミニズム自体の姿勢がバックラッシュという形でその思想の根底が揺るがされ、実践面でも、日本における女性労働者は人事処遇、雇用形態、労働条件等あらゆる面で、様々な形で加速的に周縁化され虐げられていることが多方面で報告されてきている^①。

日本の働く女性達はいかなるものを抛りどころとし、いかなるものに価値を見出し、いかなるものに自らを懸け、いかなる夢をもち、いかなる憧れを見出しているのだろうか。地球規模で吹き荒れていく合理化と市場主義化とアメリカ化の波の直中にある日本で、彼女達はいかなる存在理由を求めているのだろうか。女性達のアイデンティティはいかなる「舞台」設定のもとで「言説」の中でいかに多様に構築されており、そこには何が読みとれるのだろうか。こうしたグローバリゼーションの巨大なうねりの激動の現在、既存の知の枠組ではなかなか見えてこない彼女達の多様なアイデンティティ形成、その存在がかき消されがちな姿を、ポスト構造主義の理論から

浮き彫りにしていきたい。

一 性支配装置としての日本社会

人は思春期において、異性の視線を意識し始める。この時、自己が認識する「身体」とは、自らが支配し所有しているものとしての「身体」ではなく、「他者」の視線を通じて構築していくものとなっていく。この時期にある女性は、男性からの「欲望の眼差し」を意識し始め、「観られる身体」としての自己意識を持ち始め、様々な自分を演じてみせていくようになる（上野 1999）。そうして、例えば小学館や光文社などの二十歳代の女性をターゲットにした所謂「女性雑誌」を意識し始める時、その「身体」はもはや自分の管理下ではなく異性を中心とした無数の「他者」の欲望の「監視の眼差し」に委ねられている。絶えず男性の「欲望の眼差し」を取り込んだそうした雑誌は、異なる「ハビトウス」^②を具現化させ、異なるライフスタイルのための「消費」を煽動していく、飽くこと無き資本主義の物欲を「品格」という名のイデオロギーを添えながら正当化させ、次ぎから次ぎへと異なる「スタイル」をきらびやかに際限なく繰り広げてみせていく。こうしたものは、女性が年齢を重ねていくごとに、三十歳代の女性のためのもの、四十歳代の女性のためのものと、それぞれの年齢層と階層と趣向とにあったものに替わっていく。こうして「女性雑誌」は、「新しい流行」をつくりだしていくことで、物欲を絶え間なく溢れんばかりに生み出していく。そうしたものを女性達はひたすら追い求めていくことに「享楽」を覚えていくが、その欲望はジャック・ラカンが言うように、満たされることの無い枯渇した状態を伴う「剰余享楽」^③を生み出していく。

やがて、そうした「流行のスタイル」を丹念に「演出」していく「女性雑誌」の中で巧みに刷り込まれていく言説が、家父長制を礼賛する「内助の功」である。そのテキストの背後に「日本人女性」の生き方、そのドメス

葛藤する身体

ティックな役割、つまり「結婚」と「家庭」というイメージを織り込ませていくのである (e.g.: 坂東 2007, 香山 2005, 小倉 2003, 上野 2002)。この状況をアメリカ型の個人主義の場合の婚姻関係と比較すると、日本人女性の「親密性」の文化が浮き彫りにされる。つまり、アメリカの場合、「独立」が重んじられ、夫婦の間では性愛が中心の核となるのに対して、日本の婚姻関係の場合、親子関係が中心となる (リブラ 1998)。ここで、女性は「母」としての役割が一つの美德として家族の中心に置かれ、女性の自己の価値判断は結婚相手によって評価がなされる。「世間の眼差し」は、働く女性自身ではなく、もっぱら結婚の相手の「ハビトウス」に賭けられる。「かけがえない自分」をその中で演じていくことになるが、ここで、上野によれば、「自分にとってかけがえないあなた」ではなく「誰かにとってかけがえない自分」という「他者」との関係において自己承認を求めているとされている (上野 1998)。「自分があなたにとってかけがえない存在でありたい」という基盤において、「恋愛」と「結婚」という「舞台」において個人のパフォーマンスを忠実に実行する「行為遂行体」となる。その舞台は、「他者」の視線を取り込み、その無言の評価と眼差しを「世間」として自らに内面化させ自らを律する場である。

既婚女性の場合、単一のパートナーである「夫を支える役割は私以外の誰にも務まらない」と考える。そこに自分の在り方に意義を見出そうとする。「関係の絶対性」の原理が舞台装置で働く。他方、未婚女性の場合、自己の存在確認を、単一の他者に全面的に依存することができなくなる。そこで、複数の「他者」との関係において自己の存在確認をする。「関係の偶発性」において、自己存在を表明しようと思わず、様々な相手の欲望の視線の中に取り込まれる。かつ、様々な異性に対して、あるいは、社会的に未だ承認されることの無い特定の相手に対して、「純愛」を渴望する。いずれの立場においても、絶えず「他者」の視線を通じて自己を形成している。「息子にとっての自分」「彼にとっての自分」「夫にとっての自分」「彼女にとっての自分」「世間の人から見た自分」。つまり「私」とは様々な人々との「関係性」において「構築」されるが、「他者」があって初めて自己が形成されている時、そのコアにあるものは「空虚」である。

男性の存在も、「他者」である女性を通じて存立しえるが、自らを正当化させたいがゆえに、女性からの同情を欲望する。「他者」である女性からの正当化を確認した上で、男性同士の社会的紐帯である「ホモ・ソーシャル」な集団の内部での競争関係や同胞関係の中で自己を確立する (Sedgwick 1990)。自分の所属する何らかの組織における他の男性同士との関係において存立する男性は、この同性から「愛されたい」という自己承認を獲得し、「愛される」¹⁾の受動性を肯定できた時、それが例えば昇進という愛の変容体をより多く獲得できたと思う時、喜びにうちふるえるのである (上野 2002)。同時に、この男性中心的な社会では、セジウィックが言うように、異性愛主義を正当化させるメカニズムと呼応する。仕事上での個人的な経験、苦勞と自尊心とを理解してもらえ「他者」、賞賛してもらえ「他者」が必要となる。その「他者」が、成人の前は「ママ」であり、結婚後は妻が「代理母 (surrogate mother)」になっていく。そうして、職場においては、「OL」が男性達を「周辺」でサポートする役割を担い、さながら「代理母のように」ケアする役割を期待される (Allison 1997, Kondo 1990, Ogasawara 1998)。視点を変えれば、男性は、こうした女性の存在なくしては公の場に立つことができず、女性達に「依存して周囲の世話や面倒をみてもらわなくてはならない」⁴⁾実情にも関わらず、公の場では中心的な存在として「飯の種を稼ぐ」ことが義務とされる (Lebra 1984)。

一方、働く女性達自身の「憧れ」の対象として支持されている著名人とは、『日経ウーマン』編集長である野村浩子 (2005) によれば、女優の黒木瞳、元国連難民高等弁務官の緒方貞子、元BMW東京社長の林文子で、これらの女性に共通することは、いずれの女性も「母」として独り立ちしており、かつ長期に渡り社会に異なる形で活躍していることであるとしている。働く女性達に支持されている女性像とは、まず「母」であることであり、「主婦」としても家庭をきりもりしていることを前提にした上で、職場においての「他者」との「関係性」において自己実現させている果敢な姿なのだ。そうした女性達が子供を持たなくなり、パブリックな立場でアイデンティティを多様に構築しつつあることを尻目に、リプロダクティブヘルスの免疫学を専門とする三砂ちづる

葛藤する身体

(2004) は、「母」としての役割を医療の立場から「自然」なものとして「身体の知恵」として生物学的に所与のものとして捉え、そうした女性達に対して、あろうことか「オニババ」になっていくと言いついて捨ててみせる。こうして、パブリックな場でも、日本人女性に「世間」において期待されている「一人前」の役割とは、現在でも男性と同等に相応の評価されていないのが日本の実情である。こうした「日本人女性」の「言説」は女性に「呼び掛けられ」ていき、内面から外面から行き渡っていくのである (Foucault 1980)。

合理化が徹底的に進められる一方で、家父長制はそのまま残り、女性は、男性から望まれた役割を演じる「フォーマー」あるいは、男の演出家を作った台本どおりの「女性」の役割を演じる「行為遂行体」となっていく (Butler 1990, 1993)。会社における女性社員の感情労働としてのサービスや職場の「情動労働」を担う女性社員は、「一般職」として補佐的な存在となっていく、あるいは、契約派遣社員として必要な仕事のみあてがわれていく。これは、現代の日本のパブリックの場において、女性の自己実現の場が認識においても社会的環境においても舞台設定が十分に整えられていないことにはかならない。いわば、日本人女性にとってアイデンティティの演ずる舞台装置として「母」を理想とする社会構造が今尚根強く存在しているということである。したがって、社会組織において形成されている「ホモソーシャル」の領域において「ディスタクシオン・卓越性」を男性と同等に競うためには、女性は、男性の「ハビトウス」を身にまとい、男性の「他者」であることを「拒否」しなくてはならない (竹村 2002, 2003)。あるいは、「構造的他者」を牽制しつつも、評価を男性と競い互角あるいはそれ以上に勝ち得てきている働く女性達の幼少から蓄積してきた「文化資本」と信念と努力とは並大抵のものなどではない (Bourdieu 1998)。

では、資本主義社会において、この「母」を巡る「欲望」の渦巻く性支配装置のマテリアルなメカニズムはどのようなものだろうか。第一に、女性の構造的周辺化を正当化させるこうした家族の存在には、「抑圧の構造、不平等な関係を覆い隠す」ポリテイカルな作用が「一面」で働いている。結婚するということは、男性と女性が

それぞれ「別」の異性である「他者」が、「家族」というコンテキストで「自己」が存在することを「認め合う」ことだ。互いに他を認め合うことで初めてアイデンティティが成り立つ舞台として結婚が用意されている。ここでも中心的な原理が「母性」である（上野 1990）。自己犠牲によって、自分以外の家の「他者」である人々に労をねぎらう存在であり、「愛」を提供することによって、家族にエネルギーを提供していく存在とみられる。こうして、その結婚している女性が家事を行うことが期待されているということが正当化されていく。その役割そのものに附随される「主婦業」は一般に掃除、洗濯、家事、育児、子供の教育、夫の「身の回りの世話」等々の終わることの無い、くり返される労働である。⁵⁾つまり、結婚した女性がこうした家事労働をひきうけていくことを自明のこととして正当化する「道徳」、並びに、「家を育む」ことに自発的な姿勢を美化していく「物語」が「言説」として様々に語られていく。「愛」、「献身」、「無私」あるいは先述の「内助の功」といった言葉は、家という舞台装置の中において家事労働に対し美徳的意味をもたらす一つの「呼び掛け」でもある。例えば「素敵なミス」などという言葉で表現される意味合いもまた、こうした女性の周縁的従属的な立場を隠蔽するイデオロギーにはかならない。

第二に、男性による女性の「労働力」の支配である。グローバル資本主義のシステムとは、貨幣価値のある財を生産していく場である賃労働から女性を排除するものである。そこに、女性が参入したとしてもその労働を男性の労働よりも低く位置付けられるか、「男性以上の貢献をしない限り認められない極めて困難な処遇」に見舞われる（e.g.: 香山 2006, 熊沢 2000）。女性が男性と同様の「経済資本」と「文化資本」を蓄積し男性の「ハビトウス」を身にたとえば、男性と同等に競ってみせることが可能であるが、その実践がいかに困難を伴い精神的にも疲弊する状況かを経験していき、性支配構造がいかに堅牢なものであるかということを感じ取る（Bourdieu, 1998, 竹村 2002, 2003）。こうした性支配の構図は資本制出現以前に存在したと指摘されているが（e.g., Collier 1988, Sacks 1982）、資本制とは、この家父長制を制度的に徹底させた近代的形態とも捉えられる。家庭内での家事労働は

葛藤する身体

「生産労働」であるにもかかわらず、既婚女性によって無償で遂行される。これもまた、家父長制の従属のシステムの経済的基盤である。

第三に、家庭が、次世代に貢献する労働者や社会人を育てていく単位として「次世代再生産」の機能を有していることである。生物学的再生産を可能にするものであり、労働力の再生産をもたらすものである。産業社会は、家と職場を分離し、女性を家に押し込めることにより、女性の「再生産機能」を最大限にさせた。ここで、女性の「従属的立場」とは、出産と育児教育という「再生産機能」から生まれるとする。つまり、女性の「再生産機能」として労働力人口を提供するという価値観が強い時、あるいは「社会的再生産」のために、女性が子供を産むという役割が望まれる時に、その再生産者という役割が最大化される (Meillassoux 1981)。狩猟採集社会では、こうした役割は社会の再生産のためには、さほど期待されない。この社会では女性と男性は「平等」な関係にある。農耕社会では、より多くの労働力を必要とするというニーズが生まれる。ここで、この再生産をコントロールする年長の男性が力を得る。それが、長老／男性の力につながるものであるとする。よって、女性は、生物学的「再生産機能」の役割が社会的に期待された時、男性年長者に対して従属する存在となり、搾取される対象となり「従属的地位」に位置づけされることとなる。

したがって、このネオマルクス主義フェミニズムのモデルでは、女性は、「主婦」として家庭で「家事労働」というタダ働きをさせられる被抑圧者」であり「不払い労働を強いられる搾取される存在」である (上野 1990)。「抑圧」する者は、家長である男性である。ことに資本主義社会における家において、女性は「抑圧された階級」で、「抑圧する」男性に「従属する」存在という不平等な構図が⁶⁾できあがる。このジェンダー・ヒエラルキーは、資本主義の浸透と呼応して男性中心的なものを強化させる形で形成されていく。この男性支配的構図とは、単に家だけでなく、産業、政治、軍事、科学、医療といったあらゆる場においても、グローバルな形で展開されている (e.g., Enlore 1989, Jordanova 1989, Keller 1985, Millette 1971)。このようなアメリカを中枢とするグローバルシステ

ムの物質的構造によって、日本の「家庭内・ドメスティック」での女性は、もっぱら「母性」を求められ、その在り方が「公的・パブリック」なコンテクストに持ち込まれているということだ。実際に果たしている役割は、経済的意味において全うに価値を評価される存在としてではなく、男性の「構造的他者」として配置されているのだ (c.f., Moore 1988)。ここに、「西洋」を中枢とする「ドメスティック・家庭的」役割を引き受ける女性に対する「搾取」の構造が存在している。こうして、この「家庭」は妻と夫との間に「階級」を形成し、前者を後者に「従属させる」という「政治的」な装置となる。さらに、その「母」を巡るメカニズムが、グローバル資本主義においても作動しており、女性達を周縁化させ、家庭外の「パブリック・公的場」においても、男性と女性の間に階級が構築されていくこととなる。

ところが、女性達自身はどうだろうか。こうした「母」を中心とする家庭の構造の舞台に、「未婚」の時はそれを夢見つつ、やがて特定の「他者」との関係において、「勝ち犬」として「誇り」と「喜び」と「自尊心」にうちふるえた姿が「女性雑誌」を飾っていくのである。シングルのまままで結婚をしないで仕事をする場合であっても、男性を「中枢」とする「周縁的」な立場、ネオマルクス主義の言葉では「従属」を引き受けながらも「勝ち犬」になっていくことを憧憬していく (e.g., 白河 2008, 山田・白河 2008)。こうして、第一世界内部の「家庭」という個人的な場が、「従属」を意味する「サバルタン」が構築される政治的な意味合いを持つ場となる (Gramsci 1971)。女性達は、公的な場においても「構造的他者」としてケアするジェンダーとして「欲望」され、日本の性支配の差別構造を更に深化させていく「行為遂行体」として配置されていくのである。

だが、「従属」とは女性達自身の解釈などではなく、こうした、ネオマルクス主義が構築してみせた概念の一つ、あるいは、解釈の一つにすぎない。例えば、この理論的概念では、女性達の憧れてやまないもの、揺れ動く夢や希望、生きることへの意義を見出して、そこに取り組んでいこうとする信念と情熱とを、説明していくことは困難である (Collier 1988, Collier & Rosaldo 1981)。なぜ、ここまで性支配構造が徹底して図面に書き込まれてい

葛藤する身体

る楼閣の中に、女性達は「自らを見出そうとして」あえてその中に、葛藤を覚えながらも参入しているのだろうか。なぜ、サバルタン状況に陥れられることを自らにその身を「委ねて」いこうとしているのだろうか。唯物的な視点では、いずれの女性達の精神と行動を説明することはできない。

つまり、「言説」とは、「単一的」なものとして単純に作用しているものではない。たしかに、「母が演じられる」家庭とは一つの男性中心的家父長制を美化させる装置であり、資本主義を押し進めるグローバリズムの言説は益々この権力を強化させ、女性を従属させるという「認識論的暴力」を正当化させる。この資本主義擡頭によって「男性による女性への性支配関係」が組織的に企てられ、女性は「構造的他者」として位置づけられていく。しかし、この男性中心的な「認識論的暴力」を、女性達一人一人の感情は、「静かに」「受動的」に引き受けているわけではない。また、単に、それに抵抗的感情を持たずに、パブリックであれドメスティックであれ、ひたすら「母的」仕事をこなしているわけではない。

女性達の存在意義が、複数の「他者」、それが、男性達であれ、女性達であれ、その一挙手一投足について語られている時、評価されている時、賛美されている時、警戒されている時、嘲笑されている時、あるいは、翻弄されている時、その女性達自身の感情、思考、対応、そして「解釈」が様々に立ち上がる。こうした知覚、感情、意味とは、そうしたサバルタン状況にある「従属」したものとしての立場から生み出されているのではなく、ラカンが解釈するように、「言葉」という「他者」の「シニフィアン」を通じて、「欲望」の根源から生み出されているものである。敷衍しよう。第一に、「自我」とは、周りの人々の「欲望」を取り込むことにより芽生え、その時間のプロセスの流れにおいて「言葉」を通じて構築されるものである。この「言葉」は、原初的に意味内容を「示す」作用と、それ以外の潜在的内容を「弾く」作用との二面性がある。同時に、この「言葉」とは「他者」から投げ掛けられるものであり、そこに果てしない「欲望」の世界が織り成され、欠如と享樂とが際限なく生み出されていく。アイデンティティとは原初的に「言葉」により創られていく自我であり、こうした潜在的に疎外

と恐怖と不信感の源にもなりうる異質な「他者」との関係性において構築されるものである。換言すれば、原初的に埋め込まれている「疎外」と「恐怖」から立ち上がってみせるための原動力、つまり、「創造力」と「解釈する能力」と「衝突を乗り越える忍耐」があって初めて文化的なものとして構築される。「自我」とは不安定な虚無感を孕むもので「他者の欲望」により成る「他我」である。自己が「アイデンティティ」として、様々な「物語」を紡いでいこうとする時、そこにはそうした潜在的排除と疎外が立ちはだかるからこそ、それらを、一度「措定」させた上で、「言葉」の二面性のもう一方の対極にある「安堵感」や「心地良さ」や「自負心」などによって「抑圧」し「否定」していく操作を行ってみせ、解釈として構築してみせる。

第二に、この構築されていく解釈としての「アイデンティティ」とは、「他者」とのやりとりや関係性から生まれていくが、その「他者」とは、既婚であれ未婚であれ、不特定多数の認識上の「他者」、原初的に幼児期から組み込まれた成長していくために不可欠な「他者」、あるいは「性支配構造」をトランスナショナルに展開していくホモ・ソーシャルな紐帯を紡ぎ出す「他者」である。「他者」から投げ掛けられる「言葉」によって自我は組み立てられていく。原初的にはそれが母親であり父親であった。これが成長していく長い時間プロセスにおいて、空間の果てしない広がりにおいて、「他者」からの「欲望の眼差し」の中に自らの「身体」を「委ねていく」ところにアイデンティティが構築される (Butler 2005)。「自己」の「身体」とは自らが自由に操作するものではなく、「他者」の欲望の中において逐次動態的に構築されるものである。この「他者の欲望」の眼差しとは時空を超え「身体」を「横断・トラヴァース」し、同時に、その「他者」である評者の「呼び掛け」も絶えず働きかけ、その一挙一動を監視され、それに応えていくプロセスの時間軸の中に「主体」として構築される。ジュディス・バトラーが一貫して主張してきているように、「自己」が自らを思い通りに捉えて、思うがままに演じていると考えている時は、既に、その演技とは「他者」の欲望の中にあるものである (Butler 1990, 1993, 1997, 2005)。こうした「他者」との関係性の中に、自分の物語を紡いでいこうとする「アイデンティティ」が立ち表れていく

葛藤する身体

こととなる。こうして、「わたし」とは、時空間で荒涼と広がる実体のない「媒体」となり、そこに介入する無数の「他者」との間で物語が作られていく磁場となる。そこに、葛藤を抱きながらも自負心が生まれ、挫折を味わいながらも這い上がるとうとする信念が育まれ、限界を思い知らされながらも情熱を保とうとするのである。

トランズナショナルに拡充する男性中心的家父長制でもあるグローバルゼーションのコンテキストにおいて、「ヘゲモニー」は日本の女性に対して、「日本人女性」としていかに「品格」を体現しているかを評価し、その期待の視線に応える演技者としての女性自身もまた、それを見事に体現してみせる。未婚の女性であっても、既婚の女性は一つの「モデル」として、様々な媒体で「対象a」を「享楽」していき、女性達はそれを貪欲に追い求める。それが「欠如」したものとして渴望してやまないものであるが、その欲望は、更に「代替物」を見つけ出し渴望していく。苦境を味わいつつも超越していき、挫折を経験しつつも希望を見出し、苦痛で締め付けられそうになりながらも楽しさを見つけ出そうとする「文化的操作」と「構築的解釈」によって、その「言説」は内面から外面から女性の身体に働き掛けていくのである。例えば、「母を演ずること」という「呼び掛け」は「身体に埋め込まれた」「自然」なものではなく、女性達自身が「行為遂行体」としてその「疎外」と「恐怖」とを、自らの創造力と解釈学によって「抑圧」し「却下」させていきながら紡ぎ出しているという「文化的」に「構築」したものである。仕事であれ、家庭であれ、休日の時間であれ、そのヘゲモニックな「言説」は「身体」を貫いていく。トランズナショナルなコンテキストにある「ヘゲモニー」の「呼び掛け」をする「他者」との関係性の中に、あるいは、「他者」の視線の中に自らの物語を構築してみせていくのである。

こうして、「母」を巡る言説によって、女性の「身体」に働き掛けられ、呼び掛けられ、それに応える形で、そのヘゲモニーに身を委ねていき、「行為遂行体」として、自らもその言説の微視的单位として積極的に参加していくこととなるのである。だが、それだけだろうか。メタファーとしての女性の「身体」に、グローバルに展開される男性中心的な「書き込み」が一方的になされていくことをひたすら引き受けているのだろうか。異なる

次元において女性達の「解釈」と「物語」があるのではないだろうか。それによって新たなポジションを得てそのヘゲモニーを再解釈し異なる権力関係を創り上げることがはないのだろうか。

二 「スピリチュアリズム・新霊性文化」が日本の女性にもたらすポリティクス

ここで、サバルタン状況に曝されやすい主体の意味を徹底的に解読することを企図するエドワード・サイードの「対位的分析 (Contrapuntal analysis)」を発動することにより、全く異なる立場からオールターナティブな世界がまた別の言説として繰り広げられていることを浮かび上がらせてみよう (Said 1993: 18)。対位法とは音楽理論からの概念で、異なる様々な旋律を錬磨させていきながら楽曲を展開させる作曲技法で、サイードはこの音楽の編成を社会の在り方を読み解くのに自らの理論を展開させていった。この戦略的分析は、「文化テクスト」のテクスチャーの織り成され方に、一見何の関係も無さそうなものが、実は縦横に交錯する意味の競演があることを暴いていくものである。これは、個人的な語りや興味を単に取るに足らない瑣末なものとしてではなく、実は、それらがグローバルに展開される荒涼とした「現実界」のかなたに意味あるものとして展開されている対抗の政治学を読み解いていく試みである。

女性たちを夢中にさせているものの一つ、ある個人的な語りにも耳を傾けてみよう。彼女達はこうした男性中心的なグローバルイズムの「状況コンテクスト」とは異次元の「霊的」な存在に、自らを委ねていくことで、異なる価値観と美意識を錬磨させている。それが近年話題となっている「スピリチュアリズム」の世界である (香山 2006, 磯村 2007)。彼女達が聞き入る「霊的」力を持つ「スピリチュアリスト」は、普通の人では見ることのできない世界を感じることができたり、死後の世界や前世の魂や守護霊を感じ取ることができたりすると信じられている。これは、霊や神と対話できる霊媒師などの一般社会では受け入れられにくい存在ではなく、広くテレビ、

葛藤する身体

書籍、インターネット、雑誌などに登場し、近年、広く共感を獲得されてきている現象である。

人間の経験を科学や医学や自然科学の領域では説明しきれないものを、宗教的独自の「法則やパワー」に基づいて「スピリチュアリズム」や「霊的」なものを通じての説明をしようとする傾向が、現代人に浸透してきている（島藺 2007）。大切なのは科学の真偽というよりは、例えば、自分の死後の生命や生まれ変わりの知識、自分の関係する人達の霊的な意味、自分が身につけるモノに内在する「不思議な力」など、こうしたものを信じる人々に対して、「望ましい心理的影響を与える」。現代科学には、内的なもの、意識、深み、神聖なものが欠如し、科学的な現実こそ唯一絶対の真実であるという独断的態度が現代の病理に通じているとする。例えば、死後の生、生まれ変わり、霊魂など眼に見えないものを感じ取りながら、実際の現在の人生をどうするべきかという判断を、それぞれのスピリチュアリストは独自の説明や解釈の仕方を提供していくのだ。霊的な考え方や霊界からのメッセージを取り入れた説明、人生の考え方、心の持ち方などのアドバイスや示唆を与えていく。スピリチュアルなものを支持する人々は、守護霊や前世や先祖の力を借りて自分が生きることができないか、悩みから救われるのではないかと信じる。人は日々の日常生活で葛藤や苦悩を抱えているために、自然科学などでは見えない何かによる説明解釈に身を委ねようとする。「なぜ人は生まれて来たか」という根源的な問いに、なんらかの「超自然的力 (Supernatural Power)」を通じて答えを得ようとする。「死」、「病気」、「欲望」、「人間関係」において、人は自分の「思い通り」にすることはできない。しかし、そうした人の脆い在り方を認めて、そこから、人間として生きる目的、意味、意義を学ぼうとしている。

そうした霊的世界との「交渉・ネゴシエーション」を行う能力を持つ人々による言葉は、本、テレビ、インターネット、携帯電話など様々な媒体において語られている。例えば、江原啓之は「スピリチュアル・カウンセラー」と呼ばれ、「宇宙生命」「宇宙の波動」を取り入れた人生の指南書を執筆し、その名は広く知られている。細木数子は日本の神道や仏教や祖先信仰や中国からの易の宗教的枠組で、人の運命や宿命を占う人として著名である。

佳川奈未は「リフレイミング・セラピスト」として、人の「オーラ」「波動」「駆け巡るエネルギー」「魂の法則」を読む事ができる。いずれも「眼に見えない力」を知り、「超自然的力」を持っており、それと各人がどう繋がっているかを感じることができ、テレビ、書籍、インターネットなどを通じてその存在は広く知られている人達である。

このグローバリズムと呼応する形で登場してきたスピリチュアリズムへ傾倒してきているのが圧倒的に女性達なのである。江原啓之の二〇〇一年に刊行された『幸運を引き寄せるスピリチュアルブック』は一気に人気を博したが、これは、「女性の生き方」を扱う三笠書房の王様文庫から刊行されている。その読者の一人である林真理子は、「江原さんは人生のカウンセラード」と推薦の言葉を寄せる。細木数子の二〇〇八年に出されている『六占星術による運命』の一連のシリーズは、全て女性が表紙となり、帯には「恋愛」、「結婚」、「仕事」、「お金」、「健康」といった個人を巡るキーワードが飾る。他の書籍でも、働く三十歳代の未婚女性の葛藤を綴った『負け犬の遠吠え』の著者酒井順子は女性達の間で大きな反響をよんだが、彼女もまたスピリチュアリズム支持者でもある。女優としてだけでなく国際親善や環境問題にも取り組み、公的な立場で幅広く活躍し世間から絶えず注目を浴びる藤原紀香も、自身の著で注目を集めた『紀香魂』の中で、そうした霊的存在を積極的に肯定し、自己の在り方の一つの捉え方として、そこから得られるものを吸収している。

そこで彼女達が取り込んで行く「霊的力」はあくまでも自己回帰的なものである。江原の本の目次には次ぎのような言葉が並べられている。「心はあなたに忠実です、体もあなたに忠実です」、「お金との上手なつきあい方、知っていますか」、「仕事はあなた自身を表現する舞台です」、「夢を叶えたいあなたへのスピリチュアル・メッセージ」、「幸せな人生にはルールがあります」、「幸運を引き寄せるスピリチュアルな一日」、「(自分を)輝かせることで、周囲も注目を惹き付ける」。彼は霊的存在を読みとることができる能力があるとして、女性雑誌等の中で活発な発言をしている。こうしたスピリチュアリストの書籍は、例えば書店の「女性の生き方コーナー」などで平

葛藤する身体

積みされる。霊界との交渉を通じて、時空間を超えた形で日本の女性達は軋む不安な生活世界において自分がいかにあるべきかを模索しているのだ。そのメディアや書籍やインターネット上に繰り広げられる個人の人生に関する「呼び掛け」を自らの身体を通じ具現化させていく。グローバリズムの直中にある高度に発展した資本主義社会の日本において、こうした近年の流れとは、さながら日本が「脱魔術化」への方向とは抗する形で、「再魔術化」の様相を見せているのである（見田 2007）。

アメリカ社会においては、特に一九七〇年代から類似した動きが「ニュー・エージ (New Age)」として顕著に見られるようになり、その支持者の多くが、既存のキリスト教の教理との関係において離脱あるいは、メイン・ストリームの文化へ抵抗していった (Bellah et al. 1985, 島蘭 ibid, 湯浅監 2003)。キリスト教信者達は、人生経験のプロセスにおいて、聖書の言葉と「靈感」を信じ「神の言葉に身を委ねる」ことができる。そこでの自己の存在は他人の存在意義を認めた上で「自己犠牲的」に信仰心を示すことが望まれる。また、神と自己との関係は個人的なものであると同時に、個人と個人の間において、また個人と宗教組織において継続的な結びつきがある。定期的に集まり、指導を受け、研究会を開き、自ら信徒となり、聖典を勉強し、それを日常生活にあてはめる。ここには、生身の人間の命を巡り「創造主」である「神」との関係において「大きな物語」が埋め込まれている。これに対して、アメリカにおけるスピリチュアリズムの支持者達は、そうした利他的在り方や共同体主義的な人生の捉え方、ひいては、キリスト教における「救い主」を信じていくという信仰心から離れ、「セルフ・ヘルプ (自助運動)」を理念として「自己変革」を目指していった。こうした「宗教的個人主義」とは、アメリカの建国理念とも重なっており、例えば、アメリカ合衆国独立宣言の起草者として著明なトーマス・ジェファソンですら、そうした「自尊、自立、自己実現」の手段としての精神に惹かれている (Bellah et al. ibid)。

これに対して、日本のスピリチュアリズムの場合、グローバリゼーションを動かすネオリベリズムに疲弊した個人、その「構造的他者」として位置づけられている女性達が日々変動して不安定な不特定多数の人々との

「流動的な社会的関係性」の「状況コンテクスト」において求めてやまないものとして生まれていると解釈できる。個々人が「主人公」となり個々の問題に解釈を加えていく「小さな物語」が個々のレベルで展開される。彼女達は各々の思いの赴くままにスピリチュアリズムに傾倒し、霊的なパワーや先祖への敬意を再確認したりすることで、自己の社会的な内面的な問題への対処をする。そうした媒体を構築していく「行為遂行体」が日本においては、「構造的他者」として位置づけられている「サバルタン」状態にある女性達なのである。この政治学的「他者」とは静止したソリッドなものではなく、ちょうどグローバリゼーションが労働者にもたらした「マクドナルド的主体」がそうであるように、動態的な不安定な存在である。

アメリカ社会におけるスピリチュアリズムの特徴は、キリスト教のように利他主義ではなく、自分中心的な意義を求め、広く社会の救済ではなく自己意識の治癒を目指すという自己回帰的なものである (Wilber 2000)。日本のスピリチュアリズムもこれと類似している。組織的な教祖がいて指導するようなものではない。信者がいてそれぞれのつながりは存在しない。あくまで、各個人が、それを用いて、今の現世の自分について考える。現世の利益と個人の幸福を追究していく。自己自身の立身出世、地位追究、金銭面の成功、物的豊かさ、恋愛関係、幸運と幸福を積極的に肯定していく。個人が個人のために「夢」をかなえて幸せになることが追求される。この個人を巡る環境とはグローバルに展開されるネオリベラリズムによって加速化され、アメリカのみならず、ヨーロッパにも「宗教的個人主義」と実利的なことによる自己回帰の動きが見られる (Carrette & King 2005)。

日本において、スピリチュアリズムを支持する女性達は、例えば、物欲から逃れられないという現状に対して、金銭面で満たされることのない空しさに対して、恋愛にすがろうとして葛藤する苦悩に対して、その「身体」の内側からも外部からも「癒される感情」という解決を垣間見ようとする。「世界が平和で人類が幸せであるように」という祈りではなく、「わたしがより快適に暮らせるように」という祈りがある。自己の幸福が中心にあって、他者の幸福は考えの中には入れてはいない。「たましいを磨くこと」で自己実現をしようとする。いかに職

葛藤する身体

場環境や処遇面で納得の到底いかない場面であっても「わたしさえ変われば」、「わたしさえ頑張ることができれば」という志向がある。そうして、そこには、自己犠牲的な利他的な周りの人達のためではなく、自己追求的な利己的な自分のための思考が働いている。現実の問題や社会における困難に向き合うことだけではなく、「癒し」を求めていくものである。仕事、恋愛、結婚、健康や美、病の治療、死の恐怖や別離の悲しみの解消など、追求するのはあくまでも個人の幸福であるのみならず、徹底的な現世利益主義に基づいて、それぞれがそれぞれの立場で自己の物語を創り安堵を得ようとしている。そうして、誰もが何らかの奇跡をおこす「魔法の力」をもっているのだと信じることを通じて、自己への肯定感を持ち、前向きになろうとし、現状において自信をつける方法が必ず拓けるのだとする。こうして、スピリチュアリズムは、女性達の個々の内部において、安堵感や納得感をもたらすものとなる。

更に、自己責任を様々な解釈と示唆によって安堵感をもって包み込み、人生において、挫折や失敗も一つの自分のためのものであるという心境になる。個人の問題は、周囲の人間関係や会社を取り巻く政治的社会的システムに帰されるものであるとせず、自分自身にあるのだと考える。そうして「わたし」さえ変われば、苦しみから解放され「癒される」はずだと信じ込む。この時、自分の状態を他の人々の責任にすることも、他罰的に責めることも、抵抗することもできない状態を正当化させ内面化させられることになる。女性達が抱える問題は抵抗しようとしても抵抗しがたい「社会的問題」「政治的次元の問題」とはみなされず、スピリチュアリズムの「言説」において「個人化」され、「心理化」され、最後は「自己責任」へと回収される。ここで、積極的な自信を持つ戦略的な思考ではなく、「現状のままでもいい」「大丈夫、あなたは生まれる前から守られている」「自分の中にある本当の自分を愛そう」「今の自分をもっと好きになれば道は拓ける」という「受容」や「愛撫」や「慰め」の言葉がスピリチュアリズムで投げ掛けられる。

ここで、そうした安寧は絶えず奪われる可能性に晒されているのだということを感じ知らされているゆえに尚

更「享樂」として作動していくのである⁽⁷⁾ (c.f., Mouffe 2005)。スピリチュアリズムの言説とは「安らぎの場」あるいは「個人の癒し」として受け入れられることを渴望している人々の声を象徴するものであると同時に、そうした「安住の場」が失われ、その「癒し」がまた苦悩と煩悶とに取って代わるのではないかという欠如感に苛まれている人々の叫びを象徴するものでもある。家父長制的グローバル資本主義体制の荒波に苦境を強いられ思い悩む女性達が、そうした苦悶の中に「享樂」を見出そうとする「マゾヒズム」的な側面すら窺えるとも言えよう (Žizek 2000)。

ドメスティックな家庭での夫との関係性やパブリックな職場での男性上司との関係性や存在そのものを「思い遣る」ことが美德とされ、「ケアすること」を期待され、奮闘努力していかなくてはいけない責任と葛藤と苦悩が生じている。そうした現実の家父長的な社会で演じることが期待されている「日本人女性」が、現世利益と個人の幸福がいかなるものであるかを解釈する象徴的手段がスピリチュアリズムでもあるのだ。祖霊や様々な霊との「交渉・ネゴシエーション」を媒介して、職場や家庭という様々な「他者」との多様な「関係性」において展開される諸経験についての「オルターナティブ」な「物語り・ナラティブ」に身を委ねていく。様々な霊的つながりを確認することで、思い思いの個々の生き方を肯定していきながら、日常生活世界をスピリチュアリズムの視点から「変換・トランスフォーム」していく。そうして、認識の上での「身体の美」の追求、例えば、「消費」による個人の美の追求を肯定する「美的ジャンル」が構築されるところに「心の癒し」という感情がもたらされる (c.f., Boddly 1989)。内面において不安と希望、喜びと苦悩とが交錯している日常生活において、霊的つながりを確認する自己の「身体」は、複数の「他者」との場面を多様に解釈していく「象徴的媒体」となっていく。その「自己」は、日常の時空間を「横断・トラバース」して創られていく数々の物語において、徹底的な現世利益に基づき、個人的な物欲の追求、内面での恋愛成就、自己の幸福の願いなどを肯定的なものとして確認していく。

葛藤する身体

現実の社会での在り方を「再魔術化」させていくことで様々に解釈し、自己の内面の様々な物語を創り上げ錬磨させているのだ。そうした自己回帰的な形で「内面」の充足感と幸福感は、ヘゲモニーの押し付ける「関係性」の社会的倫理への「抵抗言説」を様々に構築していく。日本のサバルタン状態に位置づけられた女性達は、その状態を静観している受動的主体などではなく、自己回帰的な言説を象徴的な形で展開させていくことを通じて、異議を唱える「マルチチュード」の一布陣を形成しているのだ。日本でも吹き荒れるグローバルに展開される資本主義の男性中心的な言説へ抵抗をしていく「カウンターヘゲモニー」の機能を果たす装置として、スピリチュアリズムの言説を読みとることができる。⁽⁸⁾

単純に家父長制的支配体制に抵抗しているのではない。一度、グローバルなコンテクストにおいて、このヘゲモニーの「呼び掛け」に応じる形で、自らがその期待されている社会的価値観を体現してみせようと煩悶すると同時にそこに「剰余享樂」を覚えている。その上で、「カウンター・ナラティブ」を通じて「オプティミスティック・ナラティブ」を通じて、それを攪乱させ、それとは異なる価値観と美德と倫理を追求していくのである(Said 1993: 272)。自らの身体を様々に思い遣り、そのための「消費」を正当化させる言説を創り、権力装置を紡ぎ上げる言説へ抗う形のアイデンティティを構築していくのである。そうして聴衆にむけて、個人の物欲と個人の安らぎとを一つの「わたし」の物語として演じてみせるのである。その物語は一方で個人の心地良さと幸福と癒しを垣間見せて行くが、それらは脆くも儂いもので、亀裂と断絶と苦悩などにいつ襲われるかもしれないという不安も伴うものである。個人のアイデンティティはこうして時空間を超えた形で展開される様々な物語において構築されていく。

結語

アイデンティティ構築は、苦境に立たされている人の感情が絡み合い、不安と脆さを伴い象徴的に様々に表現されている。すなわち、日本の女性達のスピリチュアリズムの言説は、それぞれが、こうしたトランズナショナルな合理化の波に抗う形で、自らのアイデンティティの在り方を見せていく。女性達は、グローバルなコンテクストで「構造的他者」として位置づけられる状況を自らが読み替えて、自らの対抗言説を「美学的ジャンル」として構築し、そこに女性とはいかなるものであるか、人の幸せとは男性との関係においていかなるものか、経済関係においていかなる自己を見いだしていくかをオルタナティブな形で構築していった。スピリチュアリズムを介して語られる物語とは、個人個人の様々な経験と生活世界の解釈を展開していくもので、そこで、苦悩と癒し、不安と安らぎ、欠如感と充足感、辛さと心地良さといった人間の思いのアンタゴニスティックな側面を垣間見せていくのだ。この葛藤する「身体」とは、「自我」の物語をアイデンティティとして紡ぎ出す「象徴的媒体」であり、ネオリベリズムを進めていくグローバリゼーションの流れに対するポリテイカルなメッセージが織り込まれているのである。

注

(1) 思想面、実践面でのフェミニズムへのバックラッシュの在り方と動向を徹底的に批判している論考や討論が、日本においても以下のように多数でてきている——『バックラッシュ！——なぜジェンダーフリーは叩かれたのか?』（双風舎編集部編 2006）、『「ジェンダー」の危機を超える!——徹底討論! バックラッシュ』（若桑・加藤・

葛藤する身体

皆川・赤石編 2006)、『ジェンダー・フリー・トラブル——バッシング現象を検証する』(木村編 2005)。「働く女性」は、ネオリベリズムの合理化によって近年更にその処遇が「正社員」になることができず、「派遣労働」として必要時の人的支援とみなされていき社会の底辺へと追いやられている窮状が報告されている(小林 2007, 杉田 2005)。二十歳から二十九歳の失業者数が近年増加傾向にあるのと比例する形で、英米に渡航する留学生数が増加傾向にあり、その七割が女性で、その社会的要因としてこうした日本での男性中心的社会構造にあることが検証されている(2008 藤田)。

- (2) 「ハビトゥス (habitus)」はラテン語の *habere* (持つ) の派生語で、フランスの文化人類学者でもあり社会学者でもあるピエール・ブルデュー (Bourdieu 1987) によって提唱された概念である。「趣向、態度、外観、服装、様子、習慣、気分、性質」などの意味を持つ。人の習慣や行動や日常の行為を生み出していく原動力であり、自分の日常生活への姿勢、生き方、捉え方、俗に言う「たち」、「性分」、「性向」(倫理的性向、審美的性向、身体的性向、言語的性向があり、それぞれが関係しあって、個人の内部に蓄積され、一貫したシステムを構成している)を総括する。後にブルデューは男性と女性とが、それぞれの「身体」に蓄積させる「ハビトゥス」にジェンダー差異があることに注目し理論化させた (Bourdieu 1998)。この理論はジェンダーの桎梏を読み解くことに影響をあたえている (e.g.: 竹村 2002, 2003, 江原 2001, 2002)。

- (3) 人間は原初的に「去勢」されており「欠如」を抱えている。それを埋めようとするところに「欲望」が生まれ、無数の幻想を生み出していく。それは満たされる事の無い「剰余享楽」で、人は喜々として渴望した状態に身を委ねる (Lacan 1966)。「女性雑誌」は、「対象 a (object petit a)」としての手段の機能を果たしている。ここでは、それが、例えば、「個性」、「自分らしさ」、「自分は特別でありたい」という「自己愛」を生み出す根源となっている。

- (4) 家庭外では、例えば六本木のクラブでサラリーマンがホステス達に求めるものとは、もっぱら、男性個人のエゴイスティックな自己陶酔的存在を認めてもらいたいという欲望であることが、アメリカ人女性文化人類学者が自ら「ホステス」に扮してのフィールドワークを通じて克明に記述されている (Allison 1994)。

- (5) かつては都市部のごく一握りのブルジョワジーの階層の女性がステータスを持っていた。彼女達は、労働をせず、メイドを使える意志決定権、監督権などを行行使する存在である。「女主人」という言葉もあった。日本では戦前までは、女性

の使用人というものがいて、彼女等が家事を担っていた。「主婦」とはそうした人々を支配する人であった。京都で「奥さん」と呼ばれたのは、特定の層の人々で、また、武家の「奥方」から来ているのが「奥さん」である。現在の家庭では「主婦」とは、かつて使用人の行っていた家事労働を代行しているのである(上野 1990)。

(6) 狩猟採集社会においても、農耕社会においても、女性は働くジェンダーであることが多々指摘されてきている (e.g., Collier 1988, Leacock 1978, Lee 2003, Lutz 1988, Moore 1988)。

(7) エスニック・グループの構成員は、その社会集団を成り立たせる「大義」を崩していこうとしている「敵」がいるということを知っていることを前提にした上で、エスニック・アイデンティティを「享楽」というシニシズムを、ジジュエクを介してムフは論じている (Mouffe 2005)。日本というコンテクストにおいて「個人志向」を肯定するスピリチュアリズムの女性達の言説は、ネオリベラリズム言説が吹き荒れる国際労働市場において「サバルタン」化させられている彼女達に「癒し」をもたらしていくが、その状態とは、時空を超えて「変化」を余儀なくするトランスナショナルなコンテクストにおいて、いつ「奪われるか分からない」ものなのだ。こうした「不安」や「苦悩」を確認した上で、主体は「享楽」していくのだ。

(8) 類似した政治的作用がある言説の事例研究として、日本では、例えば、留学を通じて英語圏の文化と言語を吸収する独身女性達のエスノグラフィ (Kelsky 2001)、日本の会社で事務職として働く所謂「OL」のエスノグラフィ (Ogasawara 1998) などがある。また、この言説は、日本固有のものではなく、他のイスラーム圏の社会においても報告されている (e.g., Abu-Lughod 1986, Boddy 1989)。

参考文献

- Abu-Lughod, L. (1986) *Veiled Sentiments: Honor and Poetry in a Bedouin Society*. Berkeley: University of California Press.
 Allison, A. (1994) *Nightwork: Sexuality, Pleasure, and Corporate Masculinity in a Tokyo Hostess Club*. Chicago: University of Chicago Press.

葛藤する身体

- Bellah, R. et al. (1985) *The Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*. Berkeley: University of California Press. (1991 『心の習慣——アメリカ個人主義のゆゑ』島藺進・中村圭吾訳、みすず書房)
- Boddy, J. (1989) *Wombs and Alien Spirits: Women, Men, and the Zar Cult in Northern Sudan*. Wisconsin: University of Wisconsin Press.
- Bourdieu, P. (1987) *Distinction: A Social Critique of the Judgment of Taste*. Cambridge: Harvard University Press. (1990 『ディスタシクシオン——社会的判断力批判』石井洋二郎訳、藤原書店)
- (1998) *Masculine Domination*. Stanford: Stanford University Press.
- Butler, J. (1990) *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge. (1999 『ジャンター・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳、青土社)
- (1993) *Bodies that Matter: On the discursive Limits of "Sex"*. New York: Routledge.
- (1997) *Psychic Life of Power: Theories in Subjection*. Stanford: Stanford University Press.
- (2005) *Giving an Account of Oneself*. New York: Fordham University Press. (2008 『自己自身を説明すること——倫理的暴力の批判』佐藤嘉幸・清水和子訳、月曜社)
- Carrette, J & R. King (2005) *Selling Spirituality: The Silent Takeover of Religion*. New York: Routledge.
- Collier, J. F. (1988) *Marriage and Inequality in Classless Societies*. Stanford: Stanford University Press.
- Collier, J. F., & Rosaldo, M. Z. (1981) Politics and Gender in Simple Societies. In S. B. Ortner & H. Whitehead (Eds.), *Sexual Meanings: The Cultural Construction of Gender and Sexuality* (pp.275-329). Cambridge: Cambridge University Press.
- 江原由美子 (2001) 『ジェンダー秩序』勁草書房
- (2002) 『自己決定権とジェンダー』岩波書店
- Enlore, C. (1990) *Bananas, Beaches & Bases: Making Feminist Sense of International Politics*. Los Angeles: University of California Press.

- Foucault, M. (1980) *Power/knowledge*. New York: Pantheon Books.
- 藤田結子 (2008) 『文化移民——越境する日本の若者とメディア』新曜社
- 船曳建夫 (2003) 『日本人論』再考』日本放送出版協会
- Gramsci, A. (1971) *Selections from the Prison Notebooks*. Edited and translated by Quintin Hoare and Geoffrey Nowell Smith. New York: International Publisher.
- 磯村健太郎 (2007) 『スピリチュアルはなぜ流行るのか』PHP新書
- Jordanova, L. (1989) *Sexual Visions: Images of Gender in Science and Medicine between the Eighteenth and Twentieth Centuries*. Wisconsin: The University of Wisconsin Press.
- 香山リカ (2004) 『「雅子さま」はあなたと一緒に泣いている』筑摩書房
- (2005) 『働く女の胸のウチ』大和書房
- (2006) 『スピリチュアルにハマる人、ハマらない人』幻冬舎新書
- Keller, E. F. (1985) *Reflections on Gender and Science*. New Haven: Yale University Press.
- Kelsky, K. (2001) *Women on the Verge: Japanese Women, Western Dreams*. Durham: Duke University Press.
- 木村涼子編 (2005) 『シエンダー・フリー・トラブル——バッシング現象を検証する』現代書館
- 小林美希 (2007) 『ルポ 正社員になりたい——娘・息子の悲惨な職場』影書房
- Kondo, D. K. (1990) *Crafting Selves: Power, Gender, and Discourses of Identity in A Japanese Workplace*. Chicago: University of Chicago Press.
- (1997) *About face: Performing Race in Fashion and Theater*. New York: Routledge.
- 熊沢誠 (2000) 『女性労働と企業社会』岩波新書
- Lacan, J. (1966) *Ecrits*. New York: W. W. Norton.
- Leacock, E. (1978) Women's Status in Egalitarian Society: Implications for Social Evolution. *Current Anthropology*. 19 (2), 247-75.

葛藤する身体

- Lebra, T. S. (1984) *Japanese Women: Constraint and Fulfillment*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- リベラ・タキエ・スキヤマ (1994) 「女性にとって親密な関係——日米の文化比較を通して」『日米女性ジャーナル』17, 3-28.
- Lee, B. R. (2003) *The Dobe Ju/'Hoansi* 3rd ed. New York: Holt, Rinehard and Winston.
- Lutz, C. A. (1988) *Unnatural Emotions: Everyday Sentiments on a Micronesian Atoll & Their Challenge to Western Theory*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Meillassoux, C. (1981) *Maidens, Meat and Money: Capitalism and the Domestic Community*. New York: Cambridge University Press.
- Mies, M. (1986) *Patriarchy and Accumulation on a World Scale*. London: Zed Books.
- Millete, K. (1971) *Sexual Politics*. Chicago: University of Illinois Press. (1973 『性の政治学』藤枝濤子訳、自由国民社)
- 三砂さつね (2004) 『オニバン化する女たち——女性の身体性をとりもどす』光文社新書
- 見田宗介 (2007) 「近代の矛盾の『解凍』——脱高度成長期の精神変容」『思想』1002: 76-90.
- Moore, H. L. (1988) *Feminism and Anthropology*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Mouffe, C. (2005) *On the Political*. New York: Routledge.
- 野村浩子 (2005) 『働く女性の24時間——女と仕事のステキな関係』日本経済新聞社
- Ogasawara. Y. (1998) *Office Ladies and Salaried Men: Power, Gender, and Work in Japanese Companies*. Berkeley: University of California Press.
- 小倉千加子 (2003) 『結婚の条件』朝日新聞社
- Sacks, K. (1982) *Sisters and Wives: the Past and Future of Sexual Equality*. Chicago: University of Illinois Press.
- 酒井順子 (2003) 『負け犬の遠吠え』講談社
- Said, E. (1993) *Culture and Imperialism*. New York: Vintage. (2001 『文化と帝国主義』大橋洋一訳、みすず書房)
- Sedgwick, E. K. (1990) *Epistemology of the Closet*. Berkeley: University of California Press. (1999 『クローヤントの認識論——セクシュアリティの20世紀』外岡尚美訳、青土社)

- Sennet, R. (2006) *The Culture of the New Capitalism*. New Haven: Yale University Press. (2008 『不安な経済／漂流する個人——新しい資本主義の労働・消費文化』森田典正訳、大月書店)
- 島蘭進 (2007) 『スピリチュアリティの興隆——新霊文化とその周辺』岩波書店
- 白河桃子 (2008) 『キャリモテ』の時代』日本経済新聞出版社
- 白河桃子・山田昌弘 (2008) 『婚活時代』ディスカバー携書
- 双風舎編集部編 (2006) 『バックラッシュ!——なぜジェンダーフリーは叩かれたのか?』双風舎
- 杉田俊介 (2005) 『フリーターにとって「自由」とは何か』人文書院
- 竹村和子 (2000) 『フェミニズム』岩波書店
(2002) 『愛について——アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店
- 上野千鶴子 (1990) 『家父長制と資本制——マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店
(1999) 『発情装置——エロスのシナリオ』筑摩書房
(2002) 『差異の政治学』岩波書店
- 若桑みどり・加藤秀一・皆川満寿美・赤石千衣子 (2006) 『「ジェンダー」の危機を超える!——徹底討論! バックラッシュ』青弓社
- Wilber, K. (2000) *Integral Psychology: Consciousness, Spirit, Psychology, Therapy*. Boston: Shambhala.
- 湯浅泰雄監修 (2003) 『スピリチュアリティの現在——宗教・倫理・心理の観点』人文書院
- Zizek, S. (2000) *The Ticklish Subject: The Absent Center of Political Ontology*. London: Verso. (2007 『厄介なる主体——政治的存在論の空虚な中心』鈴木俊宏・増田久美子訳、青土社)